
【テキスト中に現れる記号について】

《》：ルビ

(例) 几帳面《きちょうめん》な

|：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

(例) 比較的 | 緻密《ちみつ》な

[#]：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

(数字は、JIS X 0213の面区点番号、または底本のページと行数)

(例) 充 [# 「仞」のにんべんに代えて牛へん、第4水準2-80-18] 《じゅうじん》

大抵のイズムとか主義とかいうものは無数の事実を几帳面《きちょうめん》な男が束《たば》にして頭の抽出《ひきだし》へ入れやすいように拵《こしら》えてくれたものである。一纏《ひとまと》めにきちりと片付いている代りには、出すのが臆劫《おっくう》になったり、解《ほど》くのにな手数がかったりするので、いざという場合には間に合わない事が多い。大抵のイズムはこの点において、実生活上の行為を直接に支配するために作られたる指南車《しなんしゃ》というよりは、吾人《ごじん》の知識欲を充たすための統一函である。文章ではなくって字引である。

同時に多くのイズムは、零碎《れいさい》の類例が、比較的 | 緻密《ちみつ》な頭脳に濾過《ろか》されて凝結《ぎょうけつ》した時に取る一種の形である。形といわんよりはむしろ輪廓《りんかく》である。中味《なかみ》のないものである。中味を棄てて輪廓だけを置《たた》み込むのは、天保銭《てんぼうせん》を背負う代りに紙幣を懷《ふところ》にすると同じく小さな人間として軽便《けいべん》だからである。

この意味においてイズムは会社の決算報告に比較すべきものである。更に生徒の学年成績に匹敵《ひってき》すべきものである。僅《わずか》一行の数字の裏面《りめん》に、僅か二位の得点の背景に殆どありのままには繰返しがたき、多くの時と事と人間と、その人間の努力と悲喜と成敗《せいはい》とが潜《ひそ》んでいる。

従ってイズムは既に経過せる事実を土台として成立するものである。過去を総束《そうそく》するものである。経験の歴史を簡略にするものである。与えられたる事実の輪廓である。型である。この型を以て未来に臨《のぞ》むのは、天の展開する未来の内容を、人の頭で拵《こしら》えた器《うつわ》に盛終《もりおお》せようと、あらかじめ待ち設《もう》けると一般である。器械的な自然界の現象のうち、尤《もっと》も単調な重複《ちょうふく》を厭《いと》わざるものには、すぐこの型を応用して実生活の便宜を計る事が出来るかも知れない。科学者の研究が未来に反射するというのはこのためである。しかし人間精神上的の生活において、吾人がもしイズムに支配されんとするとき、吾人は直《ただち》に与えられたる輪廓のために生存するの苦痛を感じるものである。単に与えられたる輪廓の方便として生存するのは、形骸《けいがい》のために器械の用をなすと一般だからである。その時わが精神の発展が自個天然の法則に遵《したが》って、自己に真実なる輪廓を、自《みづか》らと自らに付与し得ざる屈辱を憤《いきどお》る事さえある。

精神がこの屈辱を感じるとき、吾人はこれを過去の輪廓がまさに崩れんとする前兆と見る。未来に引き延ばしがたきものを引き延ばして無理にあるいは盲目的に利用せんとしたる罪過《ざいか》と見る。

過去はこれらのイズムに因って支配せられたるが故に、これからまたこのイズムに支配せられざるべからずと臆断《おくだん》して、一短期の過程より得たる輪廓を胸に蔵して、凡《すべ》てを断ぜんとするものは、升《ます》を抱いて高さを計り、かねて長さを量《はか》らんとするが如き暴挙である。

自然主義なるものが起《おこ》って既に五、六年になる。これを口にする人は皆それぞれの根拠あつての事と思う。わが知る限りにおいては、またわが了解し得たる限りにおいては(了解し得ざる論議は暫《しばら》く措《お》いて)必ずしも非難すべき点ばかりはない。けれども自然主義もまた一つのイズムである。人生上芸術上、ともに一種の因果によって、西洋に発展した歴史の断面を、輪廓にして舶載《はくさい》した品物である。吾人がこの輪廓の中味を充 [# 「仞」のにんべんに代えて牛へん、第4水準2-80-18] 《じゅうじん》するために生きているのでない事は明《あきら》かである。吾人の活力発展の内容が、自然にこの輪廓を描いた時、始めて自然主義に意義が生ずるのである。

一般の世間は自然主義を嫌っている。自然主義者はこれを永久の真理の如くにいいなして吾人生活の全面に涉《わた》って強《し》いんとしつつある。自然主義者にして今少し手強《てごわ》く、また今少し根気よく猛進したなら、自《おのずか》ら覆《くつがえ》るの未来を早めつつある事に気がつくだろう。人生の全局面を蔽《

おお》う大輪廓を描いて、未来をその中に追い込もうとするよりも、茫漠《ぼうばく》たる輪廓中の一小片を堅固に把持《はじ》して、其処《そこ》に自然主義の恒久《こうきゅう》を認識してもらう方が彼らのために得策《とくさく》ではなかろうかと思う。

[# 地から2字上げ] 明治四三、七、二三『東京朝日新聞』

底本：「漱石文明論集」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年10月16日第1刷発行

1998（平成10）年7月24日第26刷発行

入力：柴田卓治

校正：福地博文

1999年8月4日公開

2003年10月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。